

モン語版ラーマヤナ「ロイク・サモイン・ラーム」の特徴

大 野 徹*

Salient Features of the Mon Version of the Rama Story

OHNO Toru*

When Nai Pan Hla came to Japan in 1988 as a research fellow of Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, he brought with him numerous copies of Mon documents dealing with the Dhammathat code of laws, inscriptions by King Kyansittha and other monarchs in Mon, histories of Dvaravati, Hanthawaddy and Dhammazedi, Mon songs and folktales and so forth. When he left Kyoto, he gave me several documents dealing with Mon linguistics and Mon literature.

Among these papers I found two hand-written copies of a Mon version of the Rama story. The first copy is composed of 190 pages, all in verse and transcribed from an original palm-leaf manuscript preserved in the Bernard Free Library, Rangoon, Burma, several decades ago. The second was brought from Lopburi, Thailand, to Burma by a Mon citizen named Mahaphun in 1950. It is composed of 372 pages, also all in verse. According to the preface of the original palm-leaf manuscripts, both were written in 1834 by a Buddhist monk named Uttamu. In content, the two copies were found to be identical, and it is evident that they derive from the same original. The title of the Mon Rama story is given as "Loik Samoing Ram."

At the 12th International Ramayana Conference held at Kern Institute, Leiden University, Holland, in August 1995, I introduced the general structure and order of arrangement of the Mon Rama story. Here, I shall present the salient features of the Mon Rama story in comparison with Vālmīki Rāmāyana, Non-Vālmīki Rāmāyanas, and other local versions of the Rama story prevalent in South-east Asia.

Comparative study with other versions of Rāmāyana revealed the following noteworthy points in the Mon Rama story. (1) The story begins with Uttara Kāṇḍa, (2) Ram (Rāma) is described as having previously been a Bodhisattva (Future Buddha), (3) Soite (Sītā) is the incarnation of Indra's consort, Wunjeta, (4) Bali (Vāli) is the son of the Sun God, and Soingrid (Sugrīva) is the son of the Moon God, (5) Paddama Devi (Maṇḍodarī) springs from a big lotus flower, (6) the story includes the pre-matrimonial love of Ram and Soite, (7) Totsagri (Rāvaṇa) attends the archery contest, (8) Ram is exiled for twelve years instead of fourteen years as stated in Vālmīki Rāmāyana, (9) Soite changes into a female ape and becomes pregnant with Anuman (Hanumān), (10) the sister of Bali and Soingrid, Swaha, is the real mother who gave birth to Anuman, (11) Sammanukot (Śūrpaṅakhā) is related to Khara and Dūṣaṇa as mother and her children, (12) Sammanukot transforms herself into a golden hind, (13) the blood pouring out of the cave after the duel between Bali and a buffalo changes color from dark to light. The buffalo's blood is in fact diluted by rain, (14) a gigantic crab destroys the foundation of a causeway, (15) Suponnakha, the daughter of Pipek (Vibhiṣaṇa), transforms herself into the dead body of Soite, (16) Lekkhana (Lakṣmaṇa) does not behold Soite's face for three years, (17) Soite draws a portrait of Totsagri (Daśagrīva) and is exiled from Ram's palace, (18) Soite delivers a son, Ni Kwe. His replica, Ni Choa, is miraculously created by a hermit, (19) King Ram fights

* 大阪外国語大学；Osaka University of Foreign Studies, 8-1-1, Aomatani-Higashi, Minoo, Osaka 562, Japan

with his two sons, (20) Ram and Soite are reunited, (21) Soite, Ongkhut (Angada) and Inda Reje (Indrajit) are mentioned as siblings each other, since Paddama Devi, Totsagri's wife, gave birth to them (two sons and one daughter).

It is evident that Loik Samoing Ram derives directly from the Burmese version of the Rama story, since the author of the Mon version stated in his preface that he intends to compose of the Mon version solely depending on the Burmese version prevalent in Ang-way, the then capital of the Kingdom of Burma. It must be taken into consideration, however, that the Mon version also exhibits a close affinity with the Thai version, Ramakien. It is notable that the names of two sons of Soite are Ni Kwe (true ruby) and Ni Choa (grass ruby) in the Mon language, and Cao Lo and Cao But in Thai. The forms Lo and But are obviously corruptions of Lob and Mong-kut in the Thai designations. It is curious, however, that no Burmese names for the two boys can be found in the Mon Rama story.

The Mon version is also connected with the Javanese and Malayan versions of the Rama story. This view is supported by the fact that both versions have the motif of transformations of Ram and Soite into apes. Hanuman's parentage is also an essential element denoting a connection between the Mon version and the Javanese and Malayan versions. Hanuman's birth is depicted as follows in the Mon version: after Soite's resumption of human form, Ram and Lekkha cut open her womb and remove the foetus lest she should bear an ape child. A lump of flesh is thrown into the air and falls into the mouth of Swaha, who is obliged to keep her mouth open owing to her mother's curse. Swaha subsequently gives birth to Hanuman.

The Mon version has its own episodes which can be found in neither Burmese, Thai nor Malayan versions. (1) King Eggasena of the Padaratta Kingdom is deposed by his younger brother, Anupata. Ram assists Eggasena to recover his crown, (2) Praiyakan, one of Totsagri's nephews, attacks Pipek, the new king of Lenka (Lañkā), banishes him to a deep forest and occupies the palace of Lenka. Praiyakan is killed by Anuman, (3) Braiyalon, Rākṣasa king of Bottarow, marches with his army to take vengeance against Pipek, whose behavior has caused the death of Totsakan. Anuman defeats Braiyalon, slashing his neck with his elbow.

It may be instructive to point out that five outstanding features can be seen in the Mon Rama story. (1) It contains peculiar episodes which are not found in Vālmīki Rāmāyana, (2) It is derived directly from the Burmese Rama story, (3) It has considerable affinity with the Thai Rama story, (4) It is also connected with the Malayan and Indonesian Rama stories, (5) It is closely related with the Lao version and the Tai Lu version of Yunnan, China, in regard to its numerous anecdotes and episodes.

初 め に

マハーバーラタと並ぶインドの二大古典作品の一つラーマーヤナは、中央アジアを経て中国、チベット、日本へと伝播しているだけでなく、インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、カンボジア、ラオス、ベトナム、ビルマ等東南アジア諸国にも広く普及流布し、それぞれの土地の文化に直接、間接の影響を与える一方、その土地の文化や慣習を受け入れて独特の形態を備えるに至っている。東南アジア各国の研究者の間ではそれぞれの土地の現地語ラーマーヤナ版の紹介、研究にとどまらず、英語、ドイツ語、フランス語、オランダ語等ヨーロッパ各国語への翻訳も盛んに行なわれている。最近では、文献として伝承されたものの他に、口承によるものや影絵芝居の脚本など研究対象も多方面に亘ってきている。

筆者は、京都大学東南アジア研究センターの客員研究員として1988年に着任したナイ・パンフラ (Nai Pan Hla, 現在名桜大学教授) がセンターでの任期を終えて他の大学へ移籍する際、ビルマから持参したモン語の手書き資料の内幾つかの言語学的資料を譲り受けた。1年ほど前、その中にモン語で書かれたラーマ物語がある事に気付いた。モン語版ラーマ物語は、それまで研究者の間においてさえその存在は知られていなかった。筆者は、ナイ・パンフラの協力を得て早速その内容の分析に取り組んだ。その結果、モン語版ラーマ物語がビルマ語版ラーマ物語を基に編纂された事、編纂した人はウッタムーという名のモン人僧侶である事、編纂執筆が開始されたのは西暦紀元1834年である事等を知った。その梗概については1995年8月下旬にオランダのライデン大学で開かれた第12回国際ラーマヤナ学会の席上特別講演という形で発表紹介した。本稿では、モン語版ラーマ物語がどのような特徴を持っているのかという点に焦点を絞り、その基とされたビルマ語版や隣接のタイ語版ラーマキエンとの比較検討から得られた研究結果について報告する。

モン語で書かれたラーマ物語にはどのような特徴があるのか。それを知るには、ヴァールミーキによって書かれたサンスクリット語のラーマヤナはもちろんの事、タミール語、ベンガル語等のインド諸語によって書かれた非ヴァールミーキ版ラーマヤナ、更には東南アジアの諸言語で書かれた各種ラーマ物語等と比較照合する必要がある。モン語版ラーマ物語「ロイク・サモイン・ラーム」は、序文で著者が述べているように、もともとビルマ語版ラーマ物語を底本として翻訳されたものである。従って比較を行なう場合には、まず底本とされたビルマ語版ラーマ物語と直接比較する事が先決であろう。しかし、現存するビルマ語版ラーマ物語の内、モン語版ラーマ物語ロイク・サモイン・ラームの底本となった版がどれなのか現状では確かめる術がない。歴史的文献として残っているビルマ語版のラーマ物語には4種（その内の3種は韻文、残りは散文）があるが、そのいずれもがモン語版ラーマ物語と共通する特徴を内包している事は事実だが、残念ながらモン語版ラーマ物語の底本となった事を立証する明確な根拠は何一つ持ち合わせていない。モン語版ラーマ物語ロイク・サモイン・ラームの底本とされたビルマ語版は、現存する4種類以外に存在していたのかも知れない。戦乱の中で散逸したのか、あるいは未発見のままどこかに写本として埋もれている可能性すら考えられないわけではない。しかし、作品の比較研究を行なう場合、現存しない幻の版を前提に議論する事は言うまでもなく非現実的である。そこで本稿では、現存するビルマ語版4種類およびインドのヴァールミーキ版、タイのラーマキエン、マラヤのヒカーヤット・スリ・ラーマ等、利用可能な他の作品との比較検討を行ない、その特徴を明らかにする。

I 登場人物の名称

モン語版ラーマ物語に登場する人物の名称は、基本的にはヴァールミーキ版のそれを踏襲しているが、独特な形を取っている場合や東南アジアの他の版と同じないしは類似の形をしている場合も見られる。ヴァールミーキ版を踏襲している例としては、ランマまたはラーム（ラーマ、カッコ内はヴァールミーキ版の形、以下同じ）、バーリー（ヴァーリー）、クンマカン（クムバカルナ）、アヌマン（ハヌマン）等がある。ビルマ語形と同じかまたは類似の形をしている例としては、レッカナ（ビルマ語レッカナ、サンスクリット語ラクシュマナ）、トッサグリー（ビ語ダッタギリ、サ語ダシャグリーヴァ）、インダ・レーチェー（ビ語エインダセイツタ、サ語インドラジッド）、ソイングリット（ビ語トゥジュイ、サ語スグリーヴァ）などがあり、タイ語形と同じが類似形を示す例としては、トッサロット（タイ語形トソロット、サンスクリット語形ダシャラタ）、ピーペク（タ語ピペーク、サ語ヴィビーシャナ）、サマヌコット（タ語サマナカー、サ語シュールパナカー）、オンコット（タ語オンコット、サ語アンガダ）、モッチャ（タイ語スパンナ・マッチャー）、ワイヤラブ（タイ語マイヤラーブ）、スワハ（タイ語サワーハ）等がある。一方、ヴァールミーキ版とも、東南アジアの他の版とも異なった、モン語独特の形を示す例としては、チャンダ・デーウィー（サンスクリット語形カウサリヤー）、ソーウェン・デーウィー（カイケーイー）、ルッパ・デーウィー（スミトラ）、パッダマ・デーウィー（マンドーダリー）、ニ・クウェ（ラヴァ）、ニ・チョア（クシャ）、ガンガ・デーウィー（タイ語形カーラ・アチャナー）、スポンナカー（タイ語形ベンヤカーイ）等がある。モン語版に表われる地名のドワワテイは、ドヴァーラヴァテイの派生形だが、ヴァールミーキ版のアヨーダヤーに対応するものとして使われている。以上のように、モン語版に登場する人物名は、(1)ヴァールミーキ版の人物名を踏襲しているもの、(2)形の上でビルマ語形に近いもの、(3)形の上でタイ語形に近いもの、(4)他のいずれの版にも見られないモン語版固有の形の4種類に分れる。

II ヴァールミーキ版との相違点

モン語版ラーマ物語をヴァールミーキ版と比較すると、物語の梗概それ自体はヴァールミーキ版と変りない事が判明する。しかしその反面、ヴァールミーキ版にはないような特徴も持ち合わせている事が窺われる。それらはヴァールミーキ版以外のインド諸語版の特徴を成すものであり、一括して非ヴァールミーキ版的特徴と呼ばれる。モン語版ラーマ物語に見られる非ヴァールミーキ版的特徴には次のようなものがある。

(1) 物語が「結びの章」(ウッタラ・カーンダ)で始まる

ヴァールミーキ版では、物語が「少年の章」すなわちバーラ・カーンダで始まっている。それに対し、モン語版ラーマ物語は物語の初めがトッサグリー(ダシャグリーヴァ)を中心とする羅刹の系譜で始まっている。これはヴァールミーキ版の「結びの章」(ウッタラ・カーンダ)に相当する。続いてモン語版では、ウンジェター(ラクシュミー)のソイター(シーター)としての再生、ラーム4兄弟の誕生、猿兄弟ヴァーリー、ソイングリッド兄弟の不義の子としての誕生、蓮華の中からのパッドマ・デーウィー(マンドーダリー)の出現、猿王国の皇太子オンコットの誕生、トッサグリーの長男スサ(インタ・レーチャー)の誕生等が述べられる。モン語版ラーマ物語では、物語の主要人物の誕生がそれぞれの関係の章(カーンダ)においてではなく、物語の冒頭で一括して述べられているという点が一つの特徴になっている。

(2) シーターの前身はインドラ神の妃

シーターは、ヴァールミーキ版では焔の畝から出土しミティラのジャナカ王に養育される事になっている(バーラ・カーンダ=少年の章)が、その「結びの章」(ウッタラ・カーンダ)では修行中をラーヴァナに口説かれて憤死したヴェーダヴァテイの生れ変りとされる。モン語版では、ソイターの前身は帝釈天の妃ウンジェターだとされる。帝釈天の下僕として仕えるトッサグリーは帝釈天の妃ウンジェターを見掛けて恋の虜となる。トッサグリーはヤモリに変身してウンジェターの館の扉の裏に隠れる。帝釈天が訪れ呪文を唱えて扉を開ける。トッサグリーはその呪文を暗記し、帝釈天が帰った後呪文を唱えて館に入りウンジェターへの思いを遂げる。帝釈天と再会した時ウンジェターはトッサグリーに騙された事を知り、復讐のため人間に再生する事を決意する。地上に降下したウンジェターはトッサグリーの妻パッドマ・デーウィーの胎内に託胎する。モン語版と類似したエピソードを述べているのがヴィエンチャン版のカンタ寺写本やバンナホントイ写本、東北タイのラーマ・ジャータカおよびブロンマチャク版等で、シーターの前身はインドラ神の四大王妃の一人ナン・スサダであり、インドラと瓜二つの容姿に整形されたハプカナスワン(またはラッパナスワン=ラーヴァナ)を背の君インドラと思い込んで身を任せる。騙された事に気付いたナン・スサダは復讐のためハプカナスワンの妻ナン・チャンタの胎内に託胎しナン・シーダーとして生まれる。なお、シーターの前身がヴィシュヌの妃である事を述べたものとしては、カンパン版(ラクシュミ)、アドブタ・ラーマーヤナ、ジャワ版スラット・カンダ(シュリー)、タイ版(ラクシュミ)等がある。ラオスのムオンシン版や雲南省の蘭嘎西賀、ビルマ語版のヤーマ物語、ヤーマ・タージン、アラウン・ヤーマ・タージン等に現われるシーターの前身は発情したラーヴァナに凌辱されて火中に飛び込み焼身自殺する点で、ヴァールミーキ版(結びの章)に近い。

(3) 捨子にされたシーター

東南アジア諸版のシーターは、前世で蒙った屈辱を晴らすために下界に降下しラーヴァナの子供としてその妻から生れる。そのためラーヴァナに災厄をもたらすと占われて箱詰めにされ海中に投棄される。モン語版でも誕生直後のソイターが産声を上げる度に多勢の羅刹が死ぬ。トッサグリーの弟ピペークによってソイターは災の基だと占われ壺に入れて川に投棄される。シーターの「捨子モチーフ」は代表的な非ヴァールミーキ要素の一つで、東南アジアでは、ジャワ版スラット・カンダ（父娘相姦を回避するため母親バンドンダリ・クララルによって海に流される）、マラヤ版ヒカヤット・スリ・ラーマ、タイ版ラーマキエン、ラオスのルアンプラバン版、ビエンチャン版、ムオンシン版、クワイ・トーラピー版、雲南省の蘭嘎西賀、ビルマ版のヤーマ物語、ヤーマ・タージン等で述べられている。復讐転生に因むシーターの捨子モチーフは、ジャイナ教のヴァースデーヴァ・ヒンディやカシミール版ラーマヤナ、アドブタ・ラーマヤナ（ラーヴァナの留守中に妊娠したその妻マンドーダリが夫に妊娠が露見する事を恐れ、胎児を地中に埋める）、チベット語版ラーマヤナ、コータン語版ラーマヤナ等、インド及びインド周辺でも広く見られる。

(4) アヌマンとラーム、レッカナとの出会い

ヴァールミーキ版ラーマヤナでは、パンパ湖のほとりを彷徨っているラーマとラクシュマナとの姿をスグリーヴァが見掛ける。ヴァーリーが遣わした刺客ではないかと疑ったスグリーヴァはリシャムカ山の洞窟に身を隠す。乞食に扮したハヌマンが二人の前に現われ自己紹介した後、二人をスグリーヴァに紹介する。モン語版ラーマ物語では、弓矢を携えたラーマとレッカナの姿をアヌマンが見掛ける。アヌマンは二人の弓の技量を知るため木の下で休んでいる二人の上に木の葉を落とす。怒ったレッカナが矢を射るが、アヌマンはその矢を手掴みにする。レッカナは眠っている兄を起して猿の話をする。

以上のように、ラーマ兄弟に最初に会ったのがスグリーヴァではなくハヌマンである事は、ヴァールミーキ版でもモン語版でも同じだが、遭遇の仕方が異なる。ヴァールミーキ版では乞食に扮したハヌマンが相手に警戒感を抱かせないよう穏やかな態度で接近するのに対し、モン語版では弓の腕前を知ろうとしたアヌマンが木の上から木の葉を落としわざと相手の関心を引き付けている。

(5) トッサグリーと対等の立場を強調したアヌマン

ヴァールミーキ版では、ランカーでの戦闘に先立ちラーマがアンガダをラーヴァナの元に遣わして、最後通告を突き付けシーターの返還かさもなくば戦闘開始かの二者択一をラーヴァナに迫る。ラーヴァナに対するラーマの最後通告はモン語版でも述べられているが、派遣される

使節はオンコット（アンガダ）とアヌマン（ハヌマン）の二人である。トッサグリーの面前に現れたアヌマンは自分の尻尾をぐるぐる巻いてトッサグリーの玉座と同じ高さにしてその上に座る。尾を長く伸して丸めその上に座ってラーヴァナと対等の立場にある事を強調する場面はタイ版やクメール版リアムケー、ビルマ語版ヤーマ物語等にもあるが、それを行なうのは使節のオンコット（アンガッド、アウングツ）である。マラヤ版ヒカヤット・スリ・ラーマやヒカヤット・マハーラージャ・ラーヴァナでは派遣される使節がアンガダではなくハヌマンとされ、尾を丸めてその上に座るのもハヌマンだとされる。

(6) シーターの後日譚（ラーマによるその追放と一児出産）

ヴァールミーキ版の「結びの章」（ウッタラ・カーンダ）では、その純潔を疑問視する巷の噂を受けてラーマがシーターを森に追放する。シーターは聖者ヴァールミーキの庵で双生児クシャ、ラヴァを出産する。成人した二人はヴァールミーキに教わったラーマヤナを吟唱することによってラーマとの親子関係を明らかにする。貞節の証明を求められたシーターは、貞節の証として割れた大地の底深く消え去る。ラーマとシーターとの関係は、このようにヴァールミーキ版ではハッピー・エンドとはなっていない。

一方、ジャワ版スラット・カンダやマラヤ版ヒカヤット・スリ・ラーマ、タイ版ラーマキエン、ルアンプラバン版プララク・プララム、ビルマ版ヤーマ物語、雲南版蘭噶西賀等、東南アジアの多くの版では、心ならずもラーヴァナの肖像を描く事になったシーターへのラーマの処刑命令と憐憫の情を催したラクシュマナによる見逃し、森の中でのシーターの一児出産、行者による一児創造といったエピソードが語られる。ヴァールミーキ版の「双生児出産」に対する「一児出産、一児創造」というこのモチーフも典型的な非ヴァールミーキ要素の一つで、ベンガル版、ジャイナ版、テルグ版、マラヤラム版あるいはセイロン版等、インド諸語版ラーマヤナの多くで見られる。モン語版の場合もソイテーによる一児出産と行者による一児創造が語られる。モン語版では、侍女達にせがまれたソイテーがトッサグリーの肖像をスレート板に描いた事から激怒したラーマに処刑を言い渡される。レッカナが妊娠中のソイテーの体を労わり見逃す。シーターは行者の庵に辿り着くという経過を辿る。

III ビルマ語版との共通点

ビルマ語版を基に翻訳執筆が行なわれたと伝えられているだけあって、モン語版にはビルマ語版との共通性を示すエピソードが多い。その代表的な例を挙げると次のようになる。

(1) ラーマの前身は菩薩

ヴァールミーキ版やカンパン版では、ラーマはヴィシュヌの生れ変わりだとされる。それはジャワ版スラット・カンダやタイ版ラーマキエン、ルアン普拉バン版パラク・パラム等においても同様である。ところがビルマ版（ヤーマ物語およびアラウン・ヤーマ・タージン）やヴィエンチャン版パラク・パラム（カンタ寺写本）、東北タイ版ラーマ・ジャータカ等では、ラーマは菩薩の生れ変わりとされる。ラーマの前身が菩薩であったとされる点においては、モン語版も同じである。ビルマ語版では、嗣子のいないダッタラッタ王が行者に貰ったバナナ2本を王妃二人に渡す。二人の王妃は自分のバナナの半分をもう一人の王妃に分け与える。王妃3人は妊娠し、男児を出産する。コータンラー妃からはヤーマ（ラーマ）王子、コーケー妃からはバラタ王子、王妃二人からバナナを半分ずつ貰って食べたトゥメイタ妃からはレッカナとタッタルグナの双生児が生まれる。この「バナナ・モチーフ」は雲南版蘭噶西賀にもみられるが、モン語版では見られない。

(2) 弓の競技へのラーヴァナの出席

ヴァールミーキ版では、シーターの婿選びとして行なわれる弓の競技（スヴァヤムヴァラ）にはラーヴァナは出席しない。ラーヴァナ（トッサカン）はタイ版ラーマキエンでも出席しない。一方、ビルマ版（ヤーマ物語、ヤーマ・タージン、アラウン・ヤーマ・タージン）やヴィエンチャン版パラク・パラム（カンタ寺写本およびバンナホントイ写本）、雲南版蘭噶西賀、ジャワ版スラット・カンダなどでは、弓の競技にラーヴァナ（ダッタギーリまたはラッパナスワン、ハプカナスワン、捧瑪加）が出席する。モン語版でもトッサグリー（ラーヴァナ）が出席する。

(3) ラーマの追放期間は12年間

ヴァールミーキ版では、アヨーダヤからのラーマ王子の追放期間を14年間とする。タミールのカンパン版でもそうである。東南アジア諸版の中では、タイ版ラーマキエンやクメール版リアムケー等が追放期間を14年間としている。それに対し、ビルマ版やムオンシン版パラク・パラム・ポンマチャク、雲南版蘭噶西賀等ではラーマの追放期間を12年間とする。モン語版でも追放期間は12年とされている。仏教経典の中の小部経典（クツダカ・ニカーヤ）に含まれるダシャラタ・ジャータカやジャイナ教版ヴァースデーヴァヒンディ等も同様である。

(4) シュールパナカーとカラ、ドウシャナとは母子

ヴァールミーキ版では、ラーヴァナの妹シュールパナカーが美丈夫のラーマを見初めて口説く。ラーマに断られラクシュマナからも冷たくあしらわれたシュールパナカーは、シーターを

殺めようとしてラクシュマナに鼻と耳とを削がれる。シュールパナカーは復讐のため兄弟のカラとドウシャナとを呼び寄せるが、その二人もラーマ、ラクシュマナに殺される。シュールパナカーとカラ、ドウシャナとが兄弟姉妹の間柄にある事はタミールのカンパン・ラーマヤナでも同じである。東南アジア諸版の中ではタイ版ラーマキエンがトゥート（ドウシャナ）、コーン（カラ）とサマナカー（シュールパナカー）とは兄弟姉妹である旨記述している。それに対し、ビルマ版やムオンシン版パラク・パラム・ポンマチャク、雲南版蘭嘽西賀等ではシュールパナカーとカラ、ドウシャナの3人を親子としている。モン語版でも森の中でラーマ兄弟を襲うのはトッサグリーの妹サマヌコットとその子2人である。

(5) 金の鹿に変身するのはラーヴァナの妹

ヴァールミーキ版では、タータカの息子マリーチャが金の鹿に変身してラーマ兄弟をおびき出す。ラーマ兄弟が去った後ラーヴァナが現われてシーターを誘拐する。ジャワ版ラーマヤナ・カカウインやスラット・カンダ、タイ版ラーマキエン、クメール版リアムケー等でもシーター誘拐のため金の鹿に変身するのは、マリーチャである。一方、ビルマ版、ムオンシン版パラク・パラム・ポンマチャク、雲南版蘭嘽西賀等では、金の鹿に変身するのはラーヴァナの妹シュールパナカーである。モン語版でもトッサグリーの妹サマヌコットが金の鹿に変身する。

(6) ランカーへの架橋工事を妨害する大蟹

ビルマ版や雲南版蘭嘽西賀、マラヤ版ヒカヤット・スリ・ラーマ等では、猿軍団によって築造されたランカーへの土手道が崩壊する。ハヌマンが海底に潜って調べると、一匹の大蟹が橋脚を破壊している。ハヌマンは蟹を捕えて陸上に放り上げる。この大蟹は、モン語版にも登場するが、ヴァールミーキ版やタイ版には登場しない。

(7) 兄嫁の顔を3年間見なかった義弟ラクシュマナ

ビルマ語版や雲南版蘭嘽西賀では、ラーマと闘うラーヴァナの子インドラジッドが妖術を駆使する。彼は飛車に乗ったまま不可視状態となる。その姿は地上の誰からも見えない。唯一の例外は過去12年間女性の顔を見た事がない人である。ラクシュマナがそれに該当する。彼は過去12年間シーターの顔を見ずに過して来た。ラクシュマナは雲間にインドラジッドの姿を視認する。ラクシュマナの指差す方向をラーマが弓矢で射抜く。

不可視となった羅刹の姿をラクシュマナが見付け出す話は、モン語版にもある。モン語版では、不可視となるのはインドラジッドではなくその父トッサグリーであり、女性の顔を見なかった期間も12年間ではなく3年間に短縮されている。この話の原形はクリッテイヴァーサのベンガル版ラーマヤナだと考えられる。インドラジタを殺せる有資格者の条件としてベンガル

版では、(1)過去14年間一睡もした事がない者、(2)過去14年間何も食べてない者、(3)過去14年間一度も女の顔を見てない者のみに限られる。

IV タイ版ラーマキエンとの共通点

モン語版ラーマ物語は「ビルマ語版を基に翻訳した」と序文で書かれているにも拘らず、ビルマ語版とではなくタイ版ラーマキエンと共通するエピソードをかなり含んでいる。モン語版の執筆に当ってビルマ語版が底版とされた事自体は否定できないものの、執筆に際してはタイ版もまた参照にされたと見られる。その具体的事例として、ラームの処刑命令の後森の中を行者の庵に辿り着いて出産したソイテーの子供と行者によって創造された子供の分身の二人に与えられた名前がある。二人の名前は、誕生直後の箇所ではマニ・クエ（真の紅玉）、マニ・チョア（草の紅玉）と記されているが、別の箇所では「二人の名前は、モン語でニ・クエ、ニ・チョアだが、タイ語ではチャオ・ロー、チャオ・ブットと言う」とわざわざタイ語の名前まで記されている事実からも窺える。モン版とタイ版との共通点としては次のような事柄が指摘される。

(1) 小鳥夫婦の喧嘩

タイ版では、行者コーダム（ゴータマ）によるカーラ・アチャナー（スワーハの母）の創造に先立つ話として、一番いのハタオリドリの夫婦喧嘩が語られる。子供のいないサケタ国の王コーダムは行者となって修行を積む。2千年の歳月の間にその顎鬚は膝にまで達する。その顎鬚に一番いのハタオリドリが巣を作る。雌が抱卵している間、雄はヒマヴァンの蓮池に餌探しに出掛ける。日が沈み蓮の花が閉じて、小鳥は花卉の中に閉じ込められる。翌朝巣に戻った雄の全身からは、蓮華の芳香が漂う。雌は、雄が他の雌と一夜を過したものと誤解し雄を詰る。雄は疑惑を否定し、自分が浮気をしたのであれば行者の罪全てを引き受けると誓う。行者は嗣子がない事自体が罪である事を悟り、供犠を行なう。炎の中から現われた美しい女性カーラ・アチャナーを行者は娶る。この小鳥夫婦の諍いのエピソードはモン語版でも見られるが、ビルマ語版には無い。

(2) 猿兄弟のヴァーリー、スグリーヴァは不義の子

ヴァーリー、スグリーヴァの誕生譚はヴァールミーキ版には無い。アドゥブタ・ラーマヤナでは、梵天の涙から生じた雌猿が一時人間の姿をしていた時に、彼女に恋したインドラとアティトヤとによって猿兄弟を産まされたとされる。猿兄弟の出自については東南アジア諸版でも、兄弟の母の不義密通譚が語られる。その代表例がタイ版ラーマキエンで、サケタ国のコー

ダム王の妃カーラ・アチャナーの美貌に目を付けたアディトゥヤ（日の神）とプラ・イン（インドラ神）とが、カーラ・アチャナーを誘惑して子供を産ませる。それがカカシュビリすなわちパーリーと弟スクリープだとされる。モン語版でも類似のエピソードが語られる。

(3) ラーマ、シーターの一目惚れ

タイ版では、プラ・ラーム、プラ・ラック兄弟をワシット、ウイスワミット両行者がチャノク王の王宮へ連れて行く。ラーム兄弟がシーダーの館の前を歩いている時、ラームの目と窓辺から見下ろしていたシーダーの目とが合う。二人は互いに一目惚れし合う。

この一目惚れの場面はモン語版でも描かれている。タイ版とは異なり、二人が遭遇する場所はソイターの館の前の通りではない。到着の挨拶に行者を訪れたラームが話している所へソイターが現われ、互いに一目惚れするのである。この一目惚れの場面はヴァールミーキ版やアドヤトマ版では見られないが、カンパン版やトウルシダース版には見られる。東南アジア諸版のラーマ物語では、タイ版以外にヒカヤット・マハーラージャ・ラーヴァナ（ベルリン版）でも見られるし、類似のエピソードは雲南版の蘭嘸西賀にもある。

(4) 尾の先端を口の中に入れたハヌマン

マラヤ版ヒカヤット・スリ・ラーマでは、ランカーを焼き払ったハヌマンは海中に飛び込んで尾の火を消す。一方、タイ版のハヌマンも海中に飛び込んで体の火を消すが、尾の先端の火だけは消えない。ハヌマンはプラ・ナート行者に消火法を教えて貫い尾の先を口に入れてやっとな火を消す。尾の先端の消火法は、モン語版の場合もタイ版と同じく尾の先を口にくわえて消す。ヴィエンチャン版カンタ寺写本では、ランカーを焼き払って戻ったフラマンとタオ・クアントオフアの二人が尻尾の残り火を消してくれるようプラ・ラムに求めるが、プラ・ラムの指示で再びランカーに戻りナン・シーダーの園の井戸水を使って消火する。

(5) 土手道築造工事を巡るハヌマンとニラパットとの対立

タイ版では、大陸からロンカー島へ渡るための土手道築造工事を巡ってハヌマンとチョムプーパンの甥ニラパットとが対立し取っ組み合いを始める。プラ・ラームは両者が軍隊の規律を乱し士気に悪影響を与えたとの理由で両者を処罰する。ハヌマンとニラパットとのこの争いは、モン語版でもカンボジアのミチャク版でも述べられているが、ハヌマンの葛藤相手はモン語版ではニラパットではなくソインクリット（スグリーヴァ）とされている。

(6) 人魚羅刹マツチャによる土手道築造工事の妨害

タイ版のラーマキエンやルアンプラバン版プララク・プララム等では、猿軍団による土手道

の築造工事をトッサカンが娘のスワン・マッチャ（ナン・マッサ）に妨害させる。マッチャは魚等配下の海の生き物を動員して橋脚を破壊する。海底に潜ってマッチャを捕えたハヌマンは彼女を口説いて築造工事を完成させる。マッチャは上半身が猿、下半身が魚という混血児マツチャヌを産む。海の生き物の女王マッチャのエピソードはモン語版でもカンボジアのミチャク版でも見られる。但し、マッチャはタイ版ではトッサカン（ラーヴァナ）の娘だが、モン語版のモッチャは地底の帝王ワイヤラブの娘だとされる。ラオスのカンタ寺写本やバンナホントイ版、東北タイのラーマ・ジャータカ等において架橋工事を妨害するのは、海底の王プラヤ・ナク（パニヤ・パツタルムまたは竜王パツタルム＝タイ版のマイヤラブに相当する）の娘4人でいずれもフーラマンやタオクアン・タオファなど4人の若者に口説かれそれぞれ男児を出産する。

(7) シーターの贖死体に変身したベンヤカーイ

タイ版では、ラーマの軍団を撤退させるためトッサカンがピペークの娘ベンヤカーイをナン・シーダーの贖死体に化けさせてプラ・ラームの陣営に漂着させる。プラ・ラームは悲嘆にくれるが、不審に思ったハヌマンが亡骸を荼毘に付す。煙に紛れて逃げ出したベンヤカーイをハヌマンが追跡して逮捕する。シーターの贖死体のエピソードは、モン語版（スポンナカ）やラオスのヴィエンチャン版（バンナホン、カンタ寺両写本）、雲南版の蘭嘽西賀（月賀嘽）等にもある。ヴィエンチャン版カンタ寺写本や東北タイのラーマ・ジャータカに登場するシーターの贖死体は幻術によるもので、ハプカナスワンの將軍パニヤ・ムオンチャンがプラ・ラムを騙すためにバナナの幹を使ってシーダーそっくりの人間を作り出していたのである。

(8) マイヤラブによるラーマ誘拐

タイ版では、トッサカンに協力を求められた冥界（パタラ）の帝王マイヤラブが、粉末睡眠薬を使って猿軍団の兵士達を眠らせプラ・ラームを地下に拉致する。救出に向かったハヌマンは蓮華の茎の中を通過して地底に向かい、スワン・マッチャの子マツチャヌの協力でラーマが幽閉されている鉄の檻を発見する。ハヌマンはトリクト山にいる蜂を掴まえて握り潰しマイヤラブを抹殺する。ラーマを誘拐したのはモン語版ではワイヤラブで、秘薬を散布して猿達を眠らせる。救出に向うアヌマンが蓮の茎の中を通り抜けて地底に達する点も、モッチャが産んだモッチャ・クンマの協力を得る点も、タイ版と変りない。ワイヤラブを殺す時アヌマンは、黄金の山に隠されているワイヤラブの心臓を石の上で潰して火中に投げ込む。マイヤラブによるラーマ誘拐のエピソードはヴァールミーキ版にはないが、雲南版の蘭嘽西賀（冥界の王の名は歪啞拉）やヴィエンチャン版バンナホントイ写本（冥界の王プラヤ・パツタルム）、カンタ寺写本（眼鏡蛇の王パニヤ・パツタルム）、ラオス版クワイ・トラピー（パツタルムの王）、

マラヤ版ヒカヤット・スリ・ラーマ（ラーワナの子パタラ・マハーラヤン）等、東南アジア諸版に広く見られる。その源は、クリティヴァーサのベンガル版ラーマヤナやタミール語のマイリラーヴァナン、マラヤラム語のラーマカタパットゥ等インドの非ヴァールミーキ版に由来している可能性が考えられる。

(9) 魔法の槍を研ぐクンバカルナ

タイ版では、トッサカンの弟クンパカーンが神から授かった四面刃の槍モッカサックに法力を回復させるため供儀を行なう。ハヌマンが犬の死骸に化け、カラスに化けたオンコットがその死骸を啄む。腐敗臭に弱いクンパカーンは嘔吐を催し供儀を中止する。しかし翌日の戦闘では彼はその槍を使い、プラ・ラックを刺して人事不省に陥らせる。モン語版の魔の槍も四面刃で、クンマカンが三面まで研磨した時に犬の死骸とカラスに化けたアヌマン、オンコットの二人が現れ研磨作業を妨害する。翌日の戦闘で槍を駆使したクンマカンは相手のレッカナを昏倒させる。モン語版がタイ版と異なる点は、クンマカンはトッサグリーの弟ではないという事である。クンバカルナの魔の槍は雲南版の蘭噶西賀では衮納白が天帝から授かった神与の手裏剣となっている。

(10) 犬の肝を取り出して持ち帰ったラクシュマナ

タイ版では、プラ・ラームにシーダー処刑を命ぜられたものを見逃したプラ・ラックは、帰途鹿の心臓を取り出して持ち帰りそれをシーダーの心臓だと偽ってラームに見せる。シーター処刑を偽るラクシュマナの話は東南アジア版のラーマ物語に共通するが、ラクシュマナが斬り取って持ち帰る証拠の品は必ずしも一致しない。モン語版では犬の肝だが、ラオスのムオンシン版、ヴィエンチャン版および雲南の蘭噶西賀版では犬の心臓だとされる。タイ版、クメール版リアムケー、ラオスのルアンプラバン版などでは鹿の心臓を持ち帰ったとされ、ヴィエンチャン版やクワイ・トラピー版、東北タイのラーマ・ジャータカ等では犬の血で塗れたパ・ラックの剣が証拠としてパ・ラムに見せられる。

(11) ラーマ父子の戦闘原因となった白象

タイ版やカンボジアのミチャク版では、プラ・ラームの子モンクット兄弟が森の中で放った矢が大木に当たって大音響を発する。不審に思ったラーマ王は生贄祭りを挙げて白馬を放つ。白馬を捕えて乗り回していたモンクット兄弟をハヌマンが捕えようとするが、逆に捕えられ縛り上げられて追い返される。この白馬はモン語版ではラーム王の王宮で生まれた白象となっている。王宮の外へ出てニ・クエ、ニ・チョア兄弟の果樹園に入り作物を食い荒らした白象は、捕えられて少年二人に乗り回される。少年を捕縛に来たアヌマンも、逆に少年に捕えられ

縛られて追い返される。

(12) 父子間の戦闘で使われた武器は相手には無害

白馬（または白象）を巡って父親ラームとその子二人との間で繰り広げられた戦闘では、父が放った矢は皆菓子に変わり、子供二人が射た矢は全て花に変わって、共に相手を傷つけない。戦闘に使った武器が相手に無害だというこのエピソードは、タイ版、モン語版、クメール版リアムケー、ルアンプラバン版、東北タイのラーマ・ジャータカ等全てに共通する。

(13) ラーマの死を伝える贖情報

シーターに再会したラーマは、タイ版でもモン語版でも、その復帰を要請するが拒否される。様々な努力がいずれも水泡に帰した後、ラーマは自分の訃報をシーターに伝え服喪に現れたシーターを捕えようとする。ラーマの死を伝える贖情報は、クメール版リアムケー、ルアンプラバン版プララク・プララム等でも述べられている。

ま と め

モン語版ラーマ物語の構成内容を子細に検討してみると、そこには四つの大きな特徴が内在している事が窺える。その第一は、モン語版ラーマ物語をヴァールミーキ版ラーマヤナと比較対照した場合、モン語版にはヴァールミーキ版に見られない特殊なエピソードが多数含まれている事である。モン語版ラーマ物語は、その特徴から見る限り東南アジアの他のラーマ物語同様、いわゆる非ヴァールミーキ版ラーマヤナの範疇に入る。第二の特徴は、「ビルマ語版ラーマ物語を基にモン語版ラーマ物語を編纂した」と序文で編者が述べている事からも分るように、モン語版を特徴づける非ヴァールミーキ的要素の中にはビルマ語版と共通するものが極めて多いという事実である。第三の特徴は、モン語版とビルマ語版とか密接な関係にある事は事実だとしても、モン語版の非ヴァールミーキ的要素の中には、ビルマ語版に対応するものが見当たらず、むしろタイ語版ラーマキエンの中に該当例が見出される場合も少なくないという事である。この事はモン語版ラーマ物語がビルマ語版ラーマ物語だけを基に編纂されたのではなく、その編纂に当たってはタイ語版もかなり参考にされた事を意味する。第四の特徴として、モン語版ラーマ物語の非ヴァールミーキ的要素にはラオス版や雲南省の蘭嘎西賀との間に共通するものが含まれているという事実である。この事実は、インドシナ半島におけるラーマヤナの分布状況とその伝播過程とを考える場合、モン—ビルマ—雲南—ラオスと繋がるベルトの存在という仮説の組立てを可能ならしめているように思われる。

参 考 文 献

- Aiyar, V. V. S. 1987. *Kamba Ramayana, a Study*. Bombay.
- Aung Hpyo, U. 1886. *Rama Thagyin* (palm leaf manuscript in Burmese).
- Bailey, H. W. 1939. The Rama Story in Khotanese. *Journal of the American Oriental Society* 54.
- Balbir, Jagbans Kishore. 1963. *L'histoire de Rama en tibétain, d'après des manuscrits de Touen-Houang, édition du texte et traduction annotées*. Paris.
- Baumgartner, Alexander. 1894. *Ramayana und die Rama Literatur der Inde*. Freiburg.
- Bizot, François. 1989. *Reamker, l'amour symbolique de Ram et Seta*. Paris.
- Bulcke, C. 1949. The Three Recensions of the Valmiki Ramayana. *Journal of Oriental Research* (Madras) 17.
- . 1952. La naissance du Sita. *Bulletin de l'école Française de l'extrême orient* 46.
- Cadet, J. M. 1970. *The Ramakien, the Thai Epic, Illustrated with Bas-reliefs of Wat Phra Jetubon*. Tokyo.
- Connor, J. B. 1925. The Ramayana in Burma. *Journal of the Burma Research Society* 15.
- Courtillier, Gaston. 1989. *La légende de Rama et Sita, extraite du Ramayana de Valmiki*. Paris.
- De Jong, J. W. 1972. An Old Tibetan Version of the Ramayana. *T'oung Pao* 58.
- Deydier, H. 1951. Les origines et la naissance de Ravana dans le Ramayana laotien. *Bulletin de l'école française de l'extrême orient* 44.
- . 1954. Ramayana in Laos. *Journal of Oriental Research* (Madras) 22.
- Godakumbura, C. E. 1946. The Ramayana, a Version of Rama's Story from Ceylon. *Journal of the Royal Asiatic Society*.
- Goldman, Robert P. 1984-1994. *The Ramayana of Valmiki, an Epic of Ancient India*. 4 vols. Princeton University Press.
- Grierson, G. A. 1921. Sita's Parentage. *Journal of the Royal Asiatic Society*.
- . 1922. The Bengali Ramayanas. *Journal of the Royal Asiatic Society*.
- . 1928. Sita Forlorn, a Specimen of the Kashmiri Ramayana. *Bulletin of the School of Oriental Studies* 5.
- . 1930. *Kashmiri Ramayana*. Calcutta.
- Griffith, R. T. H. 1915. *The Ramayana of Valmiki* (translated into English verse).
- Growse, F. S. 1978. *The Ramayana of Tulsi Das*. Allahabad.
- Hart, George L.; and Hank Heifetz. 1988. *The Forest Book of the Ramayana of Kampan*. University of California Press.
- Hooykaas, C. 1960. Old Javanese Ramayana. *Journal of Oriental Research* (Madras) 30.
- Hpo Sein, U. 1935. *Rama Thonmyo Zatwutthu*. Rangoon.
- Htoon, Hsaya. 1905. *Alaung Rama Thagyin*. Sittway.
- Huber, Ed. 1905. Etude de littérature bouddhique 1. la légende du Ramayana en Annam. *Bulletin de l'école française de l'extrême orient* 5.
- Jacob, Judith M. 1986. *Reamker (Ramakerti), the Cambodian Version of the Ramayana*. London.
- Jacobi, Herman. 1893. *Das Ramayana Geschichte und Inhalt, nebst concordanz der Gedruckten Recensionen*. Bonn.
- Juan, R. Francisco. 1969. *Maharadia Lawana*. Quezon City.
- . 1994. *From Ayodhya to Pulu Agamaniog: Rama's Journey to the Philippines*. Quezon City.
- Jumsai, M. L. Manich. 1970. *Ramayana (chef-d'oeuvre de la littérature Thaie)*. Bangkok.
- Juynboll, H. H. 1899. Eene Episode uit het Oudindische Ramayana. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indie (BIJDRAGEN)* 50.
- . 1922. Vertaling van Sarga VII van het Oudjavaansche Ramayana. *BIJDRAGEN* 78.
- . 1923. Vertaling van Sarga VIII van het Oudjavaansche Ramayana. *BIJDRAGEN* 79.
- Kats, J. 1925. *Het Ramayana op Javaansche Tempel Reliefs*. Leiden.
- . 1926-28. The Ramayana in Indonesia. *Bulletin of the School of Oriental Studies* IV.
- Kern, H. 1917. Zang I-III van 't Oudjavaansche Ramayana in Vertaling. *BIJDRAGEN* 73.
- . 1917. Zang IV-V van 't Oudjavaansche Ramayana in Vertaling. *BIJDRAGEN* 73.
- . 1917. Zang VI van 't Oudjavaansche Ramayana in Vertaling. *BIJDRAGEN* 73.

- King Rama I of Siam. 1977. *Ramayana, Masterpiece of Thai Literature Retold from the Original Version*. Bangkok.
- Ku, U. 1880. *Pondaw Rama Pyazat*. Rangoon.
- Lalou, Marcelle. 1936. L'histoire de Rama en Tibétain. *Journal Asiatique*.
- Lane, J. S. 1947. The Tocharian Punyayanta Jataka. text and translation. *Journal of the American Oriental Society* 67.
- Makhan Lal Sen. 1976. *The Ramayana of Valmiki*. New Delhi.
- Martini, F. 1938. En marge du Ramayana cambodgien. *Bulletin de l'école Française de l'extrême orient* 38.
- . 1952. Note sur l'impression de buddhisme dans la version cambodgienne du Ramayana. *Journal Asiatique*.
- Matics, Kathleen. 1979. *A History of Wat Phra Chetupon and Its Buddha Images*. Bangkok.
- Maung Gyi, Dabein U. 1910. *Pondaw Rama Lekkhana Yodaya Zat Wutthu*. Rangoon.
- Maxwell, W. E. 1886. Sri Rama, a Malay Fairy Tale Founded on the Ramayana. *Journal of the Strait Branch of the Royal Asiatic Society* 17.
- Naidu, S. Shankar Raju. 1971. *A Comparative Study of Kamba Ramayana and Tulasi Ramayana*. Madras.
- Narasimhachar, D. L. 1939. The Jaina Ramayana. *Indian Historical Quarterly* XV.
- Nath, Rai Bahadur Lala Baij. 1979. *The Adhyatma Ramayana*. New Delhi.
- Ohno Toru. 1994. The Burmese Versions of the Rama Story and Their Peculiarities. In *Tradition and Modernity in Myanmar*, edited by Uta Gartner and Jens Lorenz. Berlin.
- Poerbatjaraka, R. Ng. 1926. *De Dateering van het Oud-Jav. Ramayana*. S'-gravenhage.
- Raghavan, V. 1980. *The Ramayana Tradition in Asia*. New Delhi.
- Rai Saheb Dinesh Chandra Sen. 1987. *The Bengali Ramayana*. Calcutta.
- Richman, Paula. 1991. *Many Ramayanas, the Diversity of a Narrative Tradition in South Asia*. University of California Press.
- Ronkel, S. Van. 1919. Aanteekeningen op een ouden Maleischen Ramajana-Tekst. *BIJDRAGEN* 75.
- Roorda van Eysinga, P. P. 1843. *Geschiedenis van Sri Rama, beroemd Indisch Heroisch Dichtstuk*. Amsterdam.
- Sachchidanand Sahai. 1976. *Ramayana in Laos, a Study in the Gvay Dvorahbi*. New Delhi.
- Santosh N. Desai. 1980. *Hinduism in Thai Life*. Bombay.
- Sarkar, Himansu Bhusan. 1934. *Indian Influences on the Literature of Java and Bali*. Calcutta.
- Saveros Pou. 1977. *Ramakerti (XVI^e-XVII^e siècles) traduit et commenté*. Paris.
- . 1977. *Études sur le Ramakerti (XVI^e-XVII^e siècles)*. Paris.
- . 1982. *Ramakerti II (deuxième version du Ramayana khmer), texte khmer, traduction et annotations*. Paris.
- Schweisguth, P. 1951. *Étude sur la littérature Siamoise*. Paris.
- Shellabear, W. G. 1917. Hikayat Sri Rama, Introduction to the Text of the M.S. in the Bodleian Library at Oxford. *Journal of the Strait Branch of the Royal Asiatic Society* 70.
- Singaravelu, S. 1968. A Comparative Study of the Sanskrit, Tamil, Thai and Malayan Versions of the Story of Rama. *Journal of the Siam Society* 56.
- . 1986. The Episode of Maiyarab in the Thai Ramakien and Its Possible Relationship to Tamil Folklore. *Journal of the Siam Society* 74.
- Srinivasa Iyengar, K. R. 1983. *Asian Variations in Ramayana*. New Delhi.
- Stutterheim, A. W. 1925. *Rama-Legenden und Rama-Reliefs in Indonesien*. Munchen.
- Sundaram, P. S. 1989. *Kamba Ramayana, Bala Kandam*. Thanjavur.
- . 1991. *Ayodhya Kandam*. Thanjavur.
- . 1992. *Kishkindha Kandam*. Thanjavur.
- . 1992. *Sundara Kandam*. Thanjavur.
- . 1994. *Yuddha Kandam I, II*. Thanjavur.
- Supomo, S. 1977. *Arjuna Wijaya, a Kakawin of Mpu Tantular*. The Hague.
- Swami Satyananda Puri; and Charoen Sarahiran. 1940. *The Ramakirti (Ramakien) or the Thai Version of the Ramayana*. Bangkok.
- Sylvain, Lévi. 1918. Pour l'histoire du Ramayana. *Journal Asiatique*.
- The Government Lottery Office. 1981. *The Ramakien, Mural Paintings along the Galleries of the Temple of*

- the Emerald Buddha.* Bangkok.
- Thein Han, U; and Khin Zaw, U. 1976. Ramayana in Burmese Literature and Arts. *Journal of the Burma Research Society* 59.
- Toe, U. 1965. *Rama Yagan.* Vol. 1 1965, Vol. 2 1933. Rangoon.
- Utgikar, N. B. 1924. The Story of the Dasaratha Jataka and of the Ramayana. *Journal of the Royal Asiatic Society.*
- Vaudeville, Charlotte. 1977. *Le Ramayan de Tulsi-Das. texte hindi, traduite et commenté.* Paris.
- Vo Thu Tinh. 1972. *Phra Lak Phra Lam, le Ramayana lao.* Vientiane.
- Winstedt, R. O. 1909. Hikayat Seri Rama. *Journal of the Strait Branch of the Royal Asiatic Society* 55.
- Ziesenis, Alexander. 1963. *The Rama Saga in Malaysia.* Singapore.
- Zoetmulder, P. J. 1974. *Kalangwan, a Survey of Old Javanese Literature.* The Hague.